

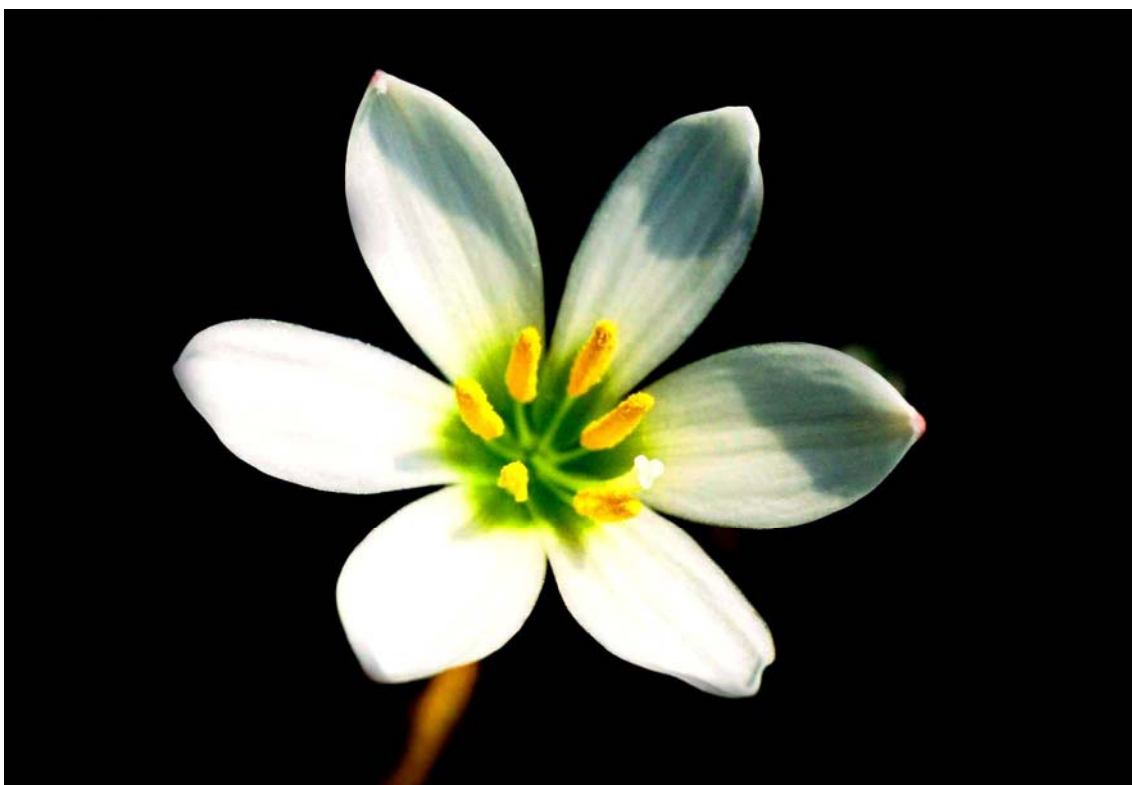
#### 14) タマスダレとキバナタマスダレ=玉簾と黄花玉簾(ステルンベルギア)

タマスダレもヒガンバナ科の多年草である。南アメリカの原産種で、日本に渡来したのは明治初年頃といわれ、鑑賞用として庭園などに植えられる。高さは 30cm ほどで、地下には球形に近い鱗茎があり、葉は細長く多肉質である。夏の終わり頃、葉の間から花茎を出し、先端に白い 6 弁の花を一つつける。花弁の形は長楕円形で、花は大きく開くことはなく楚々として美しい。和名の由来は葉が多く出るところから、この葉を簾に見立てたものである。別称としては「アメフリソウ」とか「ナツジーセン」などと呼ぶ地方もある。花期は夏から秋になるときで雨も多く、また前述の『夏水仙』同様、夏に咲く水仙といったものであろう。確かに春咲きの水仙やクロッカスによく似ている。学名は『*Zephyranthes candida*』で、属名はかの西風の神「Zephyros」と花を意味する「anthos」との合成語で、種小辞は「純白の」という意味である。このためゼフィランサスとして売られていることも多い。花は生け垣の下やブロック塀の外側に植えている家が多く、花が満開になる頃には南の風が西風が変わって、秋の訪れをそこはかとなく感じさせてくれる。時々分球してあげるとよく殖えるので、花壇の縁取りなどにするといっそう引き立ってくる。陽当たりと肥沃な土を好むので、時折、油粕か化学肥料を与えるようにすると、一層のこと成績が良くなる。しかし花屋さんにはあまり売られていないのが残念である。

もう一つ、キバナタマスダレも美しく可愛らしい花である。これもヒガンバナ科の多年草で、学名は『*Sternbergia lutea*』で、原産地はヨーロッパから西アジアの地中海沿岸地方である。春の球根のところでも何度か述べたように、地中海沿岸が原産の植物は、まず弱アルカリ性土壌に植えることと、肥料を多めに与えること、それに陽当たりのよいところに植えてあげることがポイントである。できるだけ連作は避けて、同じところに植えるときには毎年石灰を入れて、土が酸性にならないように注意する。これも春の球根のところでも再三述べたことであるが、酸性になったかどうかを見分けるのはナメクジである。また、あまり寒いところでは越冬しにくい、東京周辺であれば霜囲いしなくても、楽に冬を越すことができる。寒いところでは、鉢に作るなりの努力が必要である。また本種は鉢で作っても、それほど難しい品種ではない。4号鉢に3~4球ぐらいを入れて、水捌けをよくし、堆肥を十分に混ぜた軽めの土に、球根の頭が少し出るくらいに浅めに植えるとよい。植えつける時期は、7月下旬~8月頃の暑い盛りがよく、この頃大きな花屋さんでは『ステルンベルギア』という名前で、売られていることも多い。花はクロッカスに似ているが、花の黄色はさらに鮮やかで、庭の隅に植えてもよく目立つ。葉が枯れた頃を見計らって掘りあげて、時々分球してあげるとよい。チューリップやヒヤシンスと違って、普及していない品種なので、殖えた球根を他人にあげると喜ばれる。花の取り替えっこというのも楽しいもので、時にはよい記念になる。



属名である「ゼフィランサス」として売られていることが多いタマスダレ(埼玉県東松山市)。



近くで見るとなかなか可憐な花である。純白の花が秋風を連れて来る。そしてほぼ同じ季節にステルンベルギアも負けじとばかりに美しい花を咲かせる(埼玉県東松山市)。



黄花タマスダレ、これはステルンベルギアとして売られている(埼玉県寄居町)。

[目次に戻る](#)